

図 59 ダイナマイト震源データによるマイグレーション時間断面と
反射法データによるマイグレーション後時間断面との比較

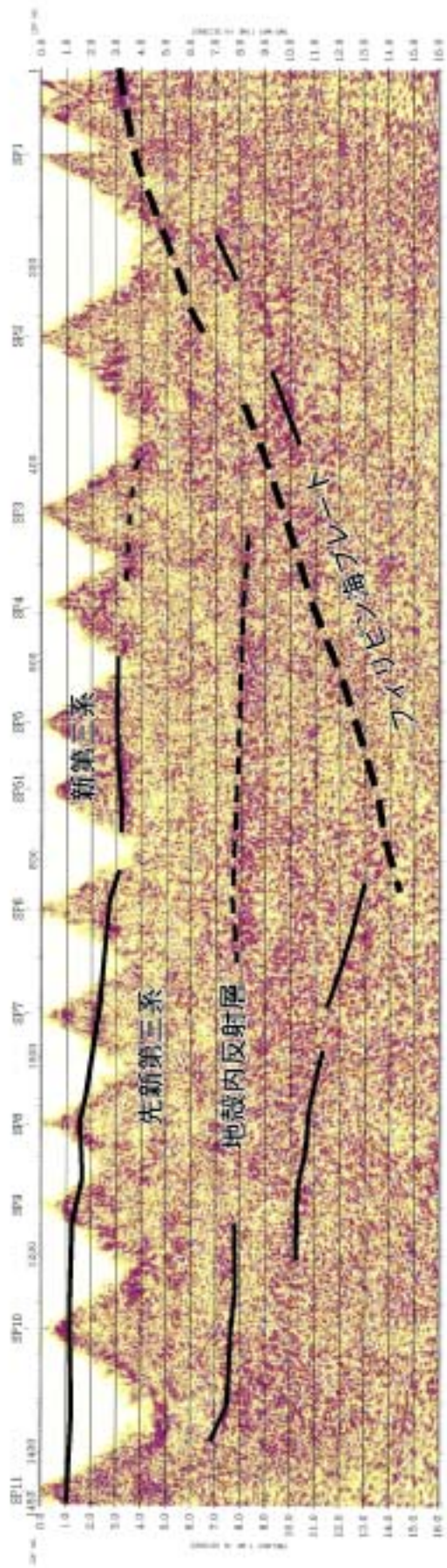


図 60 低重合法反射法地震探査断面の暫定的解釈

**BOSO-2002
WIDE-ANGLE
EXPLOSION DATA**

11 shots (50-300 kg).
2437 receiver stations
(50-1000 m).

140 km transect.

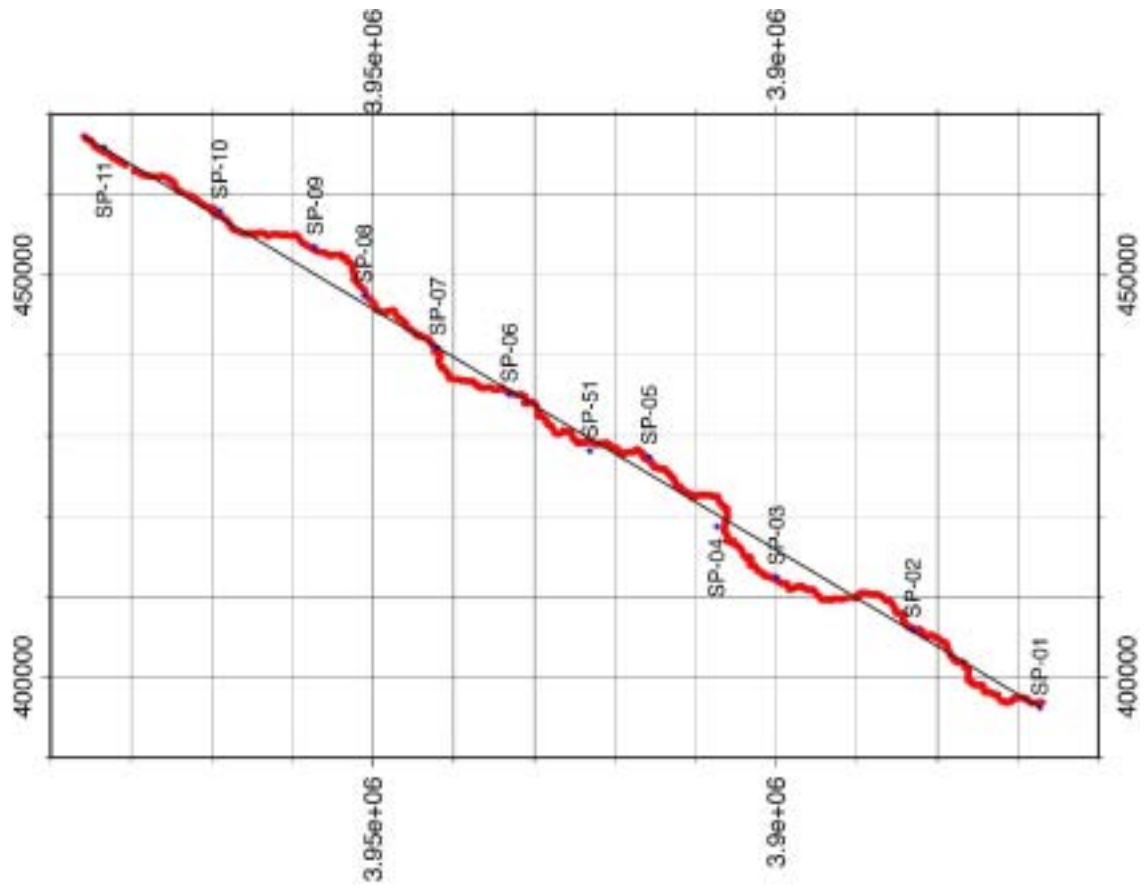


図 61 屈折波トモグラフィー解析測線

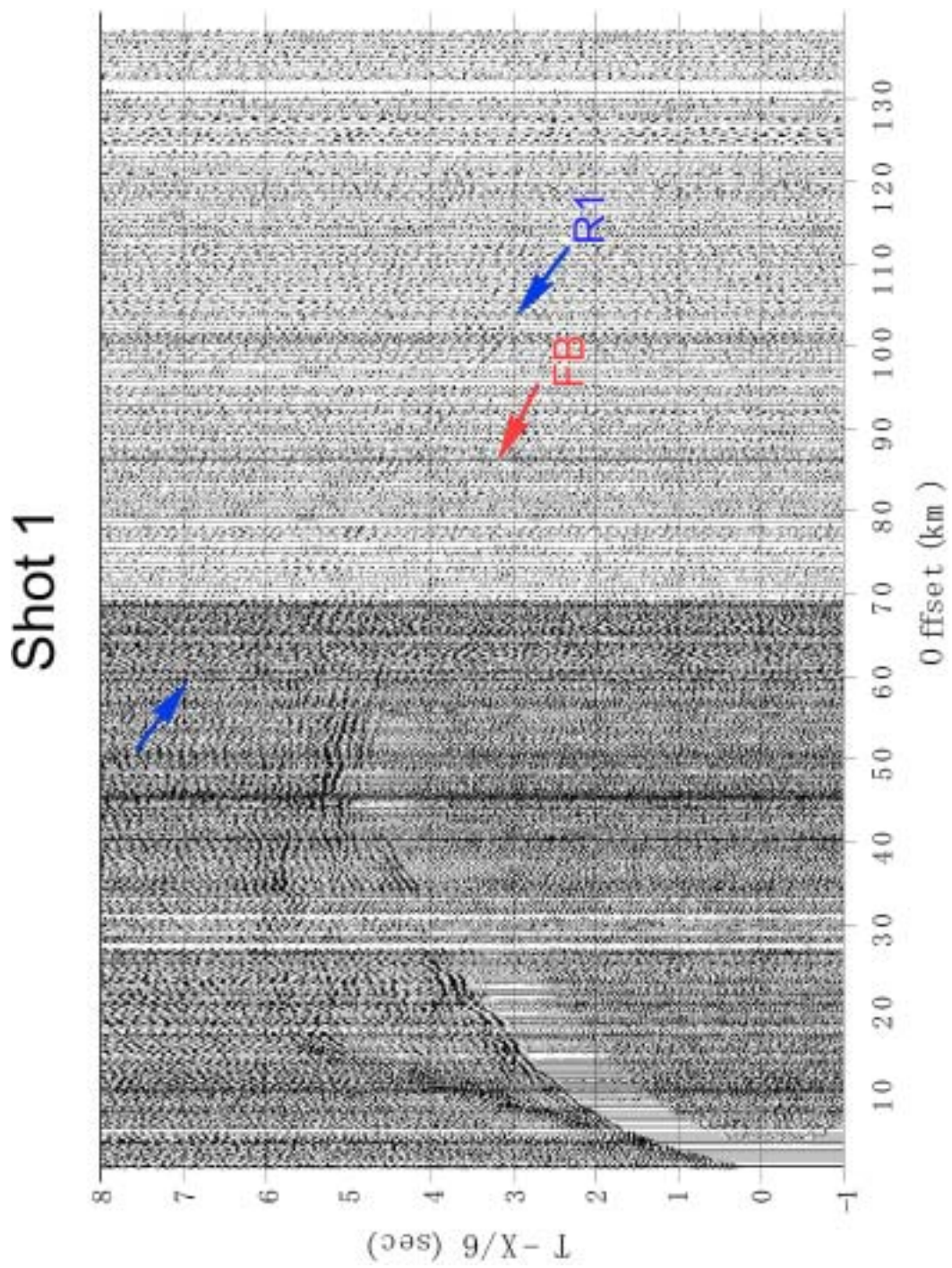


図 62 解析に用いた記録並びに注目すべき地震波形(SP1)

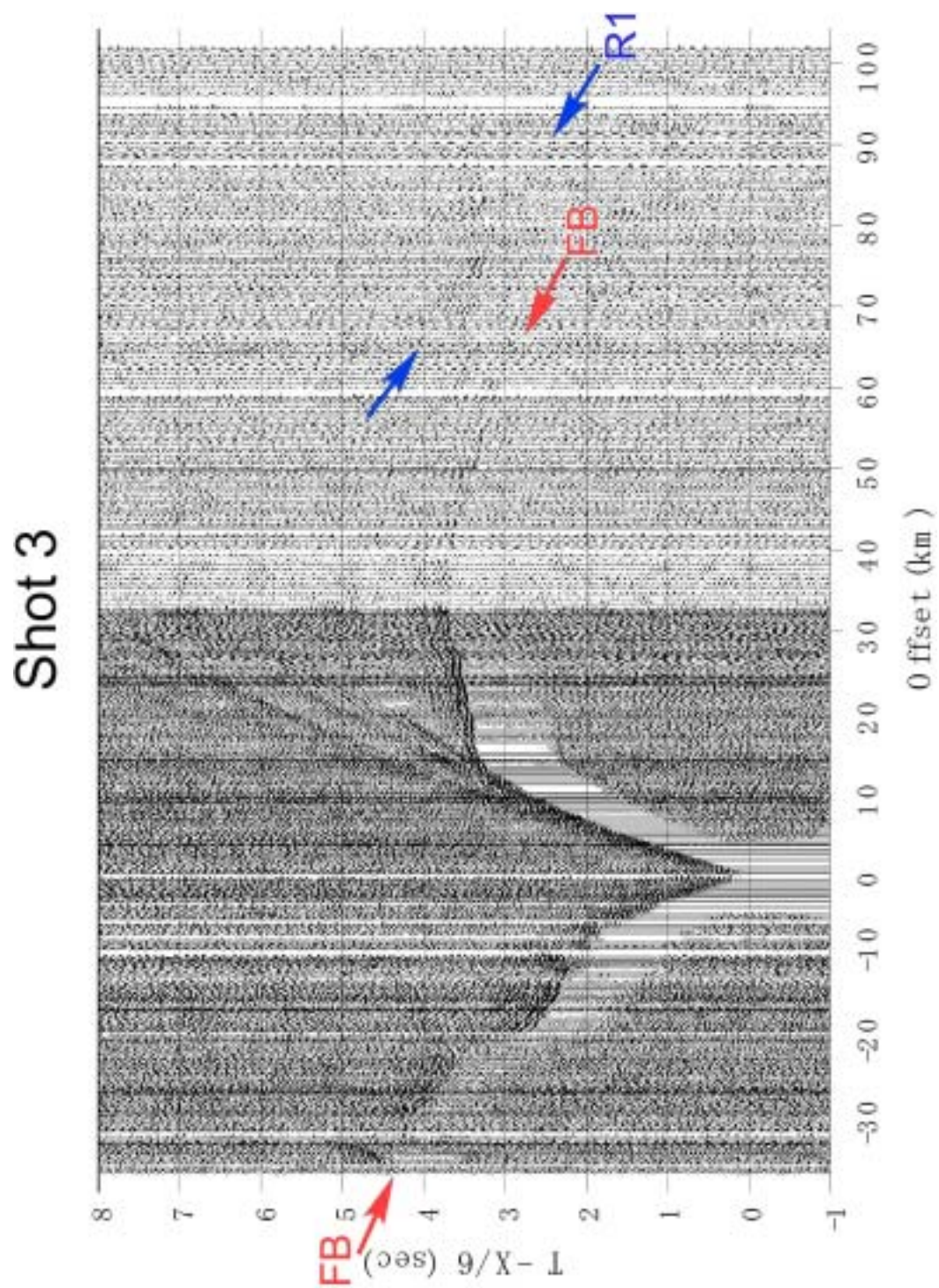


図 63 解析に用いた記録並びに注目すべき地震波形(SP3)

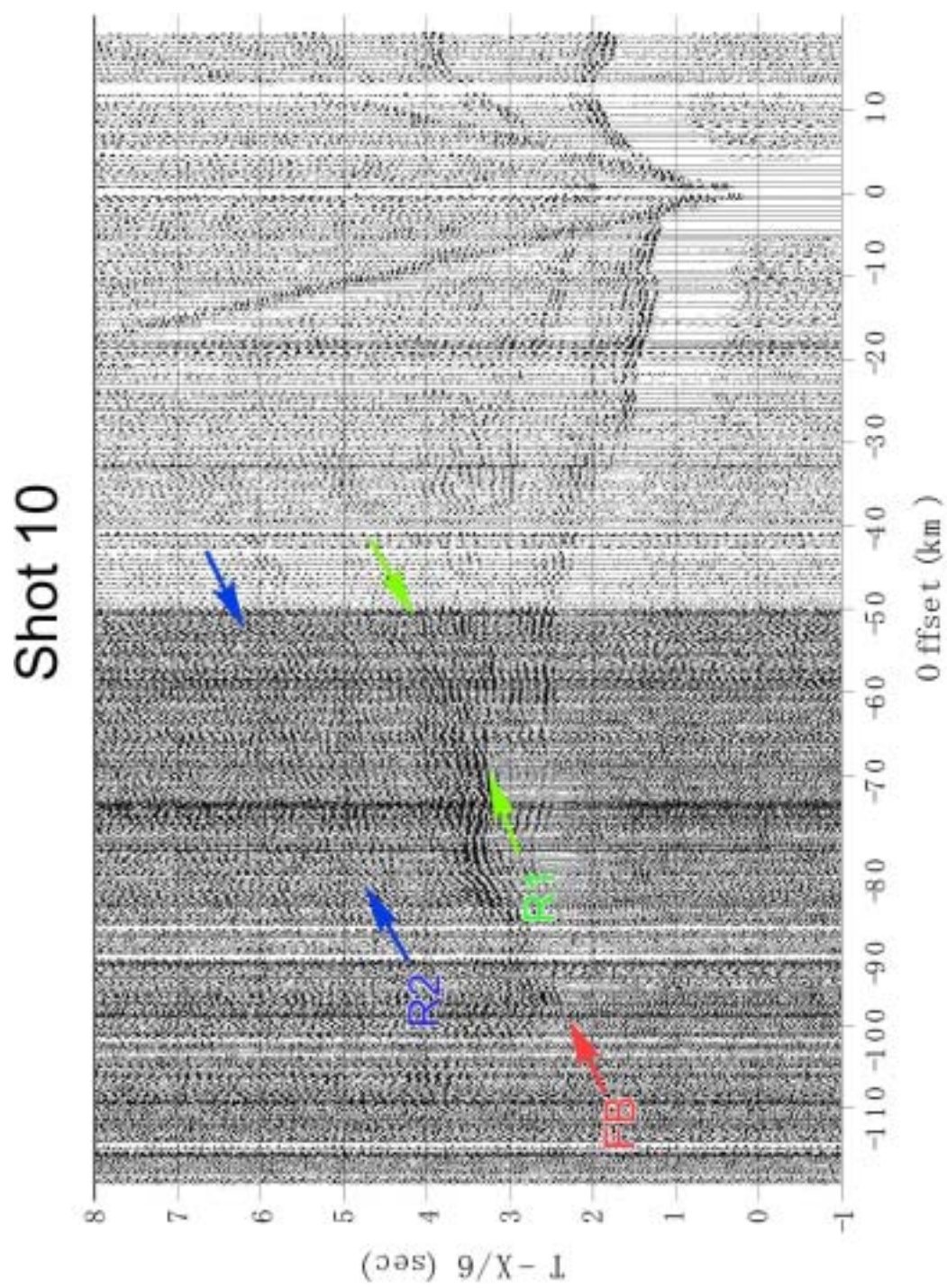


図 64 解析に用いた記録並びに注目すべき地震波形(SP10)

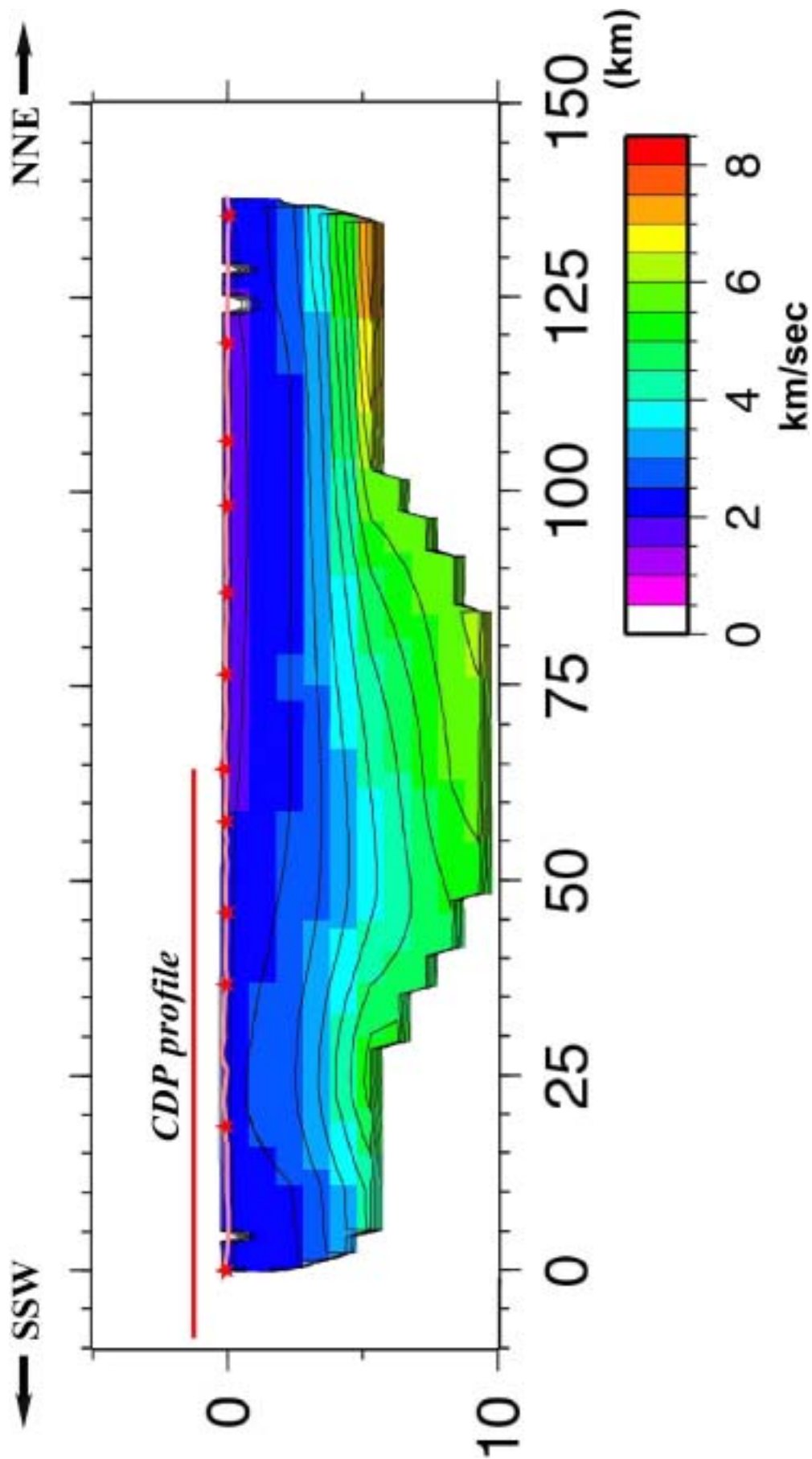



図 65 屈折波初動トモグラフィー解析による P 波速度構造断面



図 66 新聞報道の例(1)

平成 14 年 10 月 14 日 千葉日報朝刊より



房総半島の地殻探査へ
東大地震研

首都圏で地震が起こったときの揺れを予測するため、東京大学地質研究所などが房総半島の地殻構造探査を始めること3日

発表した。半島を縦断して深さ3000メートル程度まで地下構造を調べる。文部科学省の大都市大震災軽減化特別プロジェクトの一環で、これほど大規模な地殻構造探査は国内では初めてという。

探査は、10、12月にかけて行う。房総半島南端から茨城県鹿嶋市まで165キロにわたって、人工的に震動を起こし、地下深部から反射する波をとらえて、地下構造を分析する。地震計を50〜100台の間隔で設置し、精密に調べることで、プレート境界の凹凸や地下の断層などを突き止める。

房総半島の下にはフィリピン海プレートが沈み込んでおり、陸側プレートとの境界で1923年の関東大地震などが起きた。どんな揺れが起こるのか、地下構造から予測計算するほか、プレート境界の凹凸と地震が起こる場所との関係なども調べていきたいという。

図 67 新聞報道の例(2)
平成 14 年 10 月 14 日 朝日新聞朝刊より